



保育者が自分の価値観を

見つめ直すために

田代 和美

十二月のある日、小学校一年生の娘がいじめ相談の電話番号が書いてあるカードを拾ってきた。「これで何があっても大丈夫だ」そう言った。その日の夕食時、彼女は学級委員は何年生からなれるのかと聞き、自分はリーダーになりたいと言った（彼女のクラスにはグループごとにリーダーがいる）。「私がリーダーになったら、命令したり威張ったりしない優しいリーダーになれるんだけどな」と。夜、暗がりの布団の中で話をしているうちに「私は、弱くないもん。今日だって六人にやられても……」あとは涙になった。大泣きの中で聞いた話は、以前からやっていた猫ちゃんごっこに



数日前から、リーダーをやっているA子ちゃんとB子ちゃんが入り、おばあさん役をしていた娘は「ぼばあ」にされ、それがどどんエスカレートしていった。三日間くらい我慢してやっていたが、その日は我慢できなくてその仲間に入らずに、一人でブランコに乗っていた。すると六人が来て、「裏切り者」「もう仲間に入れてやらない」などと言い、その後無視をしたり、わざわざ振り向いて嫌な顔をされたと言う。A子ちゃんに対する恐怖、そして一番仲のよい友達かその中に入っていたこともショックだった。とりあえず落ち着かせるために、学校を休ませた。（これ以後の事は、もう少し冷静に距離をおいてから書きたいが、今回は大まかのことのみを記しておく。）娘の一番仲のよい友達もA子ちゃんから仲間外れや無視をされて恐がっており、今回のことも「本当はそんなことやりたくなかったんだー」と泣き叫んでいたことや仲間外れ、無視、嫌がることをわざとやるなどが日常化しているなどのことから、これが単なる一過性のことではなく、クラスの中で構造化していることが分かった。A子ちゃんの母親とは何でも話せる間柄で、彼女となら一緒に何とかやれるのではないかと思い、悩んだ末に事を伝えた。それから両方の家の中の親子の苦しい日々が続いた。子どもが寝てから我が家の中で、そしてA子ちゃんの母親と話を重ねた。「目をつぶると大きな目玉が追いかけてくる」と眠れなかったり熱を出した娘は当然だが、母親が簡単に謝って済ませてくれないA子ちゃんも苦しかっただろう。子どもたちの



話を聞いていく中で分かったことは、先生に言っても「自分たちで解決しなさい」としか言わないこと。リーダーという存在は、命令したり威張ったり、何をやっても許される、担任のような存在であること。リーダーの子どもたちは先生の価値観に沿おうとして、相当な無理をして頑張っていること（A子ちゃんにしても、入学以来、夜中に叫んだり、歩き回ったりするようになっていた）。その子どもたちだけが存在を認められ、それ以外の子どもたちはクラスの中では存在価値がないこと。その構造が子どもたちの遊びの中にも持ち込まれていて今回のようなことが生じていること。

A子ちゃんと娘の間は五日間かけて解決した。しかしクラスにその構造が残っている限り、A子ちゃんがまた学校で同じことをやらないとは言えないとA子ちゃんの母親は考えていた。娘にしてもやる側にまわらないという保証はない。二人は養護教諭に相談した。養護教諭から担任に伝えることを勧められ、悩んだ末、六日後に登校する前の晩、担任に伝えた。担任は気がつかなかったと謝ったが、しかし「誰々にいじめられた」と名指して訴えられた事実はないと言った。この間の経過を説明し、子ども同士の間は解決した旨を伝えた。しかし久しぶりに登校した日、A子ちゃんから話を聞いて謝るつもりだった子どもたちともう恐くないと思って登校した娘と一緒に遊ばせてもらえなかった。かつ担任はA子ちゃんのことを恐いと思うかどうかを子どもたちに確認し、恐がっている子どもは二人だけなので、やられた側に原因があると、



子どもたちに問題を返そうとしかしくなかった。A子ちゃんには、「熱が出た後だから今は休み時間に外と一緒に遊べないけどもうすぐまた遊べるから」と伝えたが、両方の母親は、無力感と共に気持ちが内向していった。養護教諭を通して教頭に待機してほしい旨を伝え、父親と両方の母親で担任との話し合いに臨んだ。教頭も臨席した。

今回の事後の対応についてから、結局は担任のクラス運営についての話に及んだ。私たちが話したことは、これは子どもの問題ではなく、私たちの問題であり、あなたの問題なのだということと、子どもたち一人ひとりの違いを認め、それぞれの存在価値を認めてほしいということだった。三時間かけて話し、方法を変えることなど求めていないと何度も言ったが、「私自身が変わります」と話す担任の口から出てくることは、朝自習や宿題をなくすことやリーダーを交代制にすることなど、どれも方法論だけだった。

翌日から担任の態度が急変した。急に優しくなり、朝自習も宿題もなく、休み時間の遊びの中に初めて入ってきたらしい。子どもたちは遊ぶ場所を変えた。お互いの良いところを見つける話し合いなどを持ったも言う。娘は初めて交代制でリーダー（ではなく係という呼び方になった）を経験した。朝早く登校し、それなりの苦労もあったようだが、自分が頑張ったことでおそらく初めて担任から認められたのである。



う。翌日はもっと早く登校すると担任と約束したと言った。担任の意に沿おうとする
ことは、かつてのA子ちゃんと同じ立場になる。そう考えた両親は「そんなに無理し
なくてもいいんじゃない」と言ってしまった。そしてこの日から娘は私に怒りをぶつ
け始めた。「ママをうらんでるんだ」と。翌日、早くに目覚しがなっても一向に起き
る気配のない娘を私は起こさなかった。いつもどおりの時間に起こしたが、結局その
日はお腹が痛いと言って登校しなかった。私が絡んでいると薄々感じたが、娘はスト
レートに言わないだろうと思い、担任にも伝え、保健室で過ごさせてもらった。絵を
描いたり遊んだりしている中で、「実は……」と彼女が話したことから、担任と母親
とが自分のことが原因でけんかをしていると感じていること、担任が変わったのは母
親が絡んでいると感じていることが養護の先生を通して分かった。娘はすべて察して
いたのだった。私は薄々は気づいていたものの自分を見つめていない自分にショック
を受け、身動きがとれない状況に置かれた。今回の件に担任が絡んでいるなどとい
うのは大人の論理であり、子どもにとって担任は大切な存在なのである。けんかしてい
るのではないということ、そしてとてもでもない担任の変化については、先生はみ
んなが意地悪をしないようにするためにどうしたらいいかを一生懸命考えてくれてい
るのだと伝えたが、しかし娘は担任の変化に戸惑っている。それでもこれが三学期も
続いてくれれば、以前より悪くなることはないと思う。……これが冬休みまでの経過



である。これから先は父親のみが動くことになる。

担任の先生という存在は、子どもにとって、特に先生の価値観を取り込むか取り込まないかを選択できる年齢に達するまでの幼い子どもにとっては、親と同じくらい絶対的な存在である。絶対的な存在であるからこそ、自分の持っている価値観を常に自覚し、自分の価値観に合わない子どもを肯定する価値も認めていかななくてはならない。上に述べた件も、六年生までにはこのくらい育っていなければならぬのだから、一年生はこのレベルまで来なさいと線を引く担任の価値観に必死で沿おうとすることによって存在を認められている子どもとそれに沿わないがために存在を認められない子どもとの間で生じた事である。学校教育とは違って保育者中心ではないにせよ、保育においても保育者の価値観が子どもに与える影響は大きい。しかし大人が自分の持っている価値観を自覚することは難しい。そしてそれが子どもたちに反映されていると自覚することは難しい。子どもから学ぶ、関係性の中での子どもも理解といっても現実には難しいのである。もしかしたらと薄々気づいても、認めたくないのが人間だ。いや認める認めないの前に、自分自身というのは気づかないとこの際言ってしまうてもいいのかもしれない。私自身、自分のしていることによって子どもを苦しめていると気づくことはできなかった。養護教諭という第三者の目を借りて、初めて気



づかされたのである。

一人一人を大切にする保育を目指したいと言っても、自分の持っている価値観では理解できない子どもをどのように大切にしていけるのか、現実的な問題がそこにある。保育がそれを目指そうとするのであれば、そしてそれが子どもと自分の関係の中からは見えにくいという現実があるならば、自分以外の大人の目を通して気づかせてもらうことが必要であろう。気づかせてもらうためには、人の話を受け止めるだけの度量が必要である。その度量をプロ意識と言うのかもしれない。しかし自己否定をされているように感じながら他人の話聞いていても、認めたくない気持ちで勝り、自分を見つめることにはならない。保育者一人一人が、自分の存在をしっかりと受け止めてもらっていると感じられる保育者集団の中で初めてそれは可能になる。それは子どもとの保育的關係と同じである。一人一人を大切に保育しようと志すならば、この第三者の目にお互いになれる大人の集団が、子どもたちの保育の場に必要である。

(お茶の水女子大学)